「ハレとケ」通信

第22号

「非日常」と「日常」の、日本の風情のかたちを楽しむ暮らしをご提案する季刊誌です。

建設に携わることの幸せを、おすそわけ。

物語のある建築（22）

「割烹ダイニング【丸忠】新築工事」

「ハレとケ」のある　暮らしかた

【季節に応じた暮らし方／
4月8日はお釈迦さまの誕生日／花祭り】

中津万象園「花の歳時記」

【新緑の岸辺を飾るゴモジュの花】

平成26年3月発行

富士建設本社の近くでは、春になると、ツクシ、オオイヌノフグリ、キツネノボタン、レンゲ、スズメノテッポウ、ハコベ、タンポポ…と賑やかに。そのかわいい姿を見ると、春だなあ！と嬉しくなります。

「割烹ダイニング【丸忠】新築工事」

当社にとって、本当に長いお付き合いである【琴平グランドホテル】さま。
このたび、その隣接地に、琴平グランドホテル創業前に営まれていた割烹旅館の名前【丸忠】を冠した割烹ダイニング【丸忠】がオープンしました。（その経緯は ハレとケ通信 No.2・No.3 で特集しています）
コンセプトは【丸忠復活】―そこに込められた想いとは？
今回の物語のある建築では、そのまちで生まれ、暮らしているからこそ願う、地域再生 の想いをうかがいました。

平成26年3月28日。【割烹ダイニング丸忠】のオープニングセレモニーで、近兼社長のスピーチが始まった。

「私は、今回このレストランに名前をいただきました、【丸忠】という旅館で生まれました。

思い出すと、子供の頃、小さい旅館ながらもみんなでしっかりと結ばれて働いていたなあ、という記憶があるんです。それが、私のバックボーンなのですね。

私をそういう旅館で育ててくれた父と母に、改めて本当に感謝しています。ありがとうございました。そしてまた、今回のプロジェクトに賛同し、力を貸してくれた多くの皆さま、ありがとうございます。本当に感謝しています。…」

お世話になった人の名前を一人一人挙げ、最後に、社員皆に「ありがとう」と感謝して締めくくられたこのスピーチからは、社長の必死の思いが伝わってきた。

これほどまでに熱い想いを込めて作られ、オープンした【割烹ダイニング丸忠】。

いったいどんな場所なのだろうか。

＊＊＊＊

計画の端緒は約5年前に遡るが、当初からずっと、脳裏に描いていたイメージは、小布施の【蔵部（くらぶ）】だったという。

【蔵部】とは、長野県小布施市にある和食レストラン。250年前に作られた桝一市村酒造場の酒蔵の一部を改築し、伝統の寄り付き料理（酒造りの蔵人が食べる食事）を供する店で、日経ウーマン誌の【ウーマン・オブ・ザ・イヤー2002】にも選ばれたアメリカ生まれのセーラ・マリ・カミングスさんがプロデュースしたことでも知られている。

残念ながら、私はまだ行ったことがないので、ホームページで【蔵部】を検索してみた。お洒落な場所で、この蔵部だけでなく、宿泊、バー、イタリアンレストラン、栗を使った様々なお菓子、手盃（てっぱ）を再現した桝一市村酒造のカウンターなど、

↑紅梅亭リニューアルのためのプレゼン資料表紙

ワクワクするようなエッセンスが並んでいる。

しかし、2004年のNTTファシリティーズの特集・スペシャルインタビュー【なつかしがるみらい】によると、当初は、まったく違う、"質の良いレトルト料理と自社銘柄の酒"を出す、簡単なコンセプトな店だったという。その方針に対し、セーラさんは猛然と反対。言葉を尽くし、「自社の酒の品位を落とす」と説得、町の新しい起爆剤として香港の建築家を迎え、工夫を凝らした大がかりなプロジェクトに発展させてしまった。

同インタビューの中で、社長はこう語っている。「予算は当初計画していた10倍以上かかる。それでなくとも小布施という町で夜間営業するということ自体かつてなかったことです。果たして客は来るのか、実験的な要素が多かった。でも、このことで町がまた新しい表情、磁力を持ち始めるなら、やってみる価値はある。」。

――この【蔵部】が、「丸忠」の手本となった。

＊＊＊＊

さて、琴平というまちを、皆さまも一度は訪れたことがあると思う。

言うまでもなく、金毘羅詣りで江戸時代より大変栄えたまちであり、㊎マークの団扇やビードロ団扇などの土産物、富籤などが盛んに売られ、人気の【膝栗毛】シリーズにも登場。各種の名所図絵や、江戸時代の"旅行ガイド"にもあこがれの地として多く登場するなど、一大ブームを巻き起こした。

「金毘羅道中膝栗毛」より

また、日柳燕石ら琴平の生んだ幕末の志士は多くの文人と交流し、おなじみの"金陵"という酒の銘柄も、頼山陽が琴平を訪れた際に「中国の古都・金陵（南京。楚の時代に金陵邑が置かれたが、"この土地には王者の気がある"との言葉に警戒した秦の始皇帝により改名。その後様々な名に変遷する）を思わせる」となぞらえたことによるという。

時代が下って明治時代になってからも、讃岐鉄道や四国新道は、やはり琴平に通じ、江戸、明治期に讃岐に足を踏み入れれば、全ての交通網が琴平に向かって延びていた―と言っても過言ではないほどだ。

そのように華やかな歴史を背景に持ちながら、しかし、一方で、琴平にある江戸の風情、賑わいは姿を消しつつある。

今なお参道には多くの土産物屋が並び、いくつか残る伝統的な建物が江戸の昔を偲ばせるものの、夕方を過ぎれば閑散とし、江戸期に描かれた金毘羅詣りの光景にはほど遠い。

なぜ、まちが元気を失いつつあるように見えるのか。近兼社長、そして設計を担当した石井建築設計事務所は、今回の丸忠の計画を通じて、そのことにも向き合いたいと考えた。

小布施の【蔵部】のような存在を目指したい。丸忠ができることで、琴平のまちが元気になれば良い、と。

そのような役割を地域に対して担うには、どうすれば良いのか?と考えたとき、「琴平グランドホテルだけでなく、琴平のまちの歴史を連想させるような設えにしたい」という答えが導き出されたという。

今、【丸忠】の建物は残っていないけれど、その当時の想いをインスパイアすることで、琴平に根付き、商売をし、暮らしている人々の歴史を浮かび上がらせることができるかもしれない。

また、夕方以降に、人が集まる場所の少ない琴平において、夜も皓々と明かりが灯り賑わいにあふれる場所がホテルの外にあれば、まちが少しでも明るくなるかもしれない。「建築を通じてまちのイメージアップをはかる」とも言うべき試みである。

新しく作られる建物に、琴平の歴史を感じさせる要素を取り入れる。――そのために、石井建築事務所がこの建物に凝らした、様々な工夫を振り返ることで、この【割烹ダイニング丸忠】の物語としたい。

（以下、【丸忠】のインテリアを担当した鎌苅 祥子氏による）

【丸忠】について

(株)石井建築事務所　鎌苅 祥子 氏

＊＊＊

「今回の立地は、既存の【紅梅亭】の駐車場への増築。そのため、"建物外観のデザイン(既存との取り合い、コンセプトの体現)"、"客席からの景色(庭との絡みはなく、独立する必要性)"の点で、デメリットとなる可能性がありました。

実は石井建築事務所では、以前、同じ琴平グランドホテル様で【桜の抄】の宴会場【ゐきり】の改装も担当しています。その際には、琴平の文化も随所に散りばめてはいるものの、『歌舞伎の華やかさ』がテーマでした。

でも、今回は、『丸忠の歴史の重厚感』と、『おもてなしの空気』を創り出す事が必須条件。それに加えて、品格や高級感も必要です。

ただ、一方で、『歴史』を尊重するとはいえども、レストランとして成功するためには、新しさや、派手で格好の良いデザインも不可欠。それを実現するために、オープンキッチンの構えや料理動線、オペレーションし易さも合せて検討が必要であり、試行錯誤の繰り返しでした。

まず、建物の外観は、本プロジェクト全体のコンセプトが『【丸忠】復活』であることから、前述のベンチマークである小布施の【蔵部】のように、地域に根差した旅館の歴史を表す必要があります。

しかし、今回は、単純に実際の【丸忠】のデザインに基づくのではなく、旅館や和風商業施設を40年以上にわたり創り続けてきた石井建築事務所ならではのデザイン力と経験を活かし、梁勢や瓦の美しさ、銅板葺きの玄関庇など昔の民家建築、数寄屋の風情を1から創り上げる事を目指しました。また、塀についても周辺の古い民家でも良く見られる黒漆喰を用い、"懐かしいけれど新しい"ものを表現するように心がけました。

↑オープンキッチンでは豆絞りの鉢巻き姿の料理人の姿が見える

構造については、設計担当者(神部氏)が梁の入れ方、オープンキッチンの構え等について検討を重ねた上で、【丸忠】をインスパイアする木造の本物空間を作ることを目指しました。

木造ゆえに、空間内に柱が立つ事にはなるものの、内部に高さが作れ、その構造となる木の梁組みをひとつの演出として魅せる事もでき、よりコンセプトを前面に押しだせるレストランが出来ると考えたのです。

↑金陵倉庫の梁

↓同じく金陵の歴史を感じさせる酒造りの道具の数々

しかし、なんといっても、歴史を体現する建物デザインの実現に大きな役割を果たしたのは、地元琴平の造り酒屋【金陵】から譲り受けた古材です。

当初から古材をお願いするつもりだったわけではなく、この【金陵】の専務が近兼社長と懇意にされていることから、「創業当時から使っていた倉庫を一棟解体する」という話しを受けて、何か装飾等で使えるものがあれば、との思いで伺う事になったのですが…。

倉庫に入り、往時の木で組んだ巨大な酒樽や、ホーローの酒樽、アルミで打ち出した桶、陶器で出来た手持ちの酒樽等、

右上／道路より見る　左上／「おくどさん」より内部を望む　右下／おくどさん　左下／華やかな円形のソファ

数々の歴史を感じさせる備品を見学。『こういった道具類は、新しいレストランに直に歴史を感じさせるスパイスになるからありがたいな』と考えながら、屋根裏の荷物置き場まで上がった時、天井裏を見上げた社長が感嘆の声を上げました。

『石井建築さん！この梁すごいよ！』

そこには、当時のままの立派な曲がり梁が黒く静かに並んでいたのです。

それは、私たち建築を志す人間からすれば、誰もが感じる風格ある姿で、近兼社長も、この梁が今回のレストランに与える影響力を想像して、震えたことと思います。

こうして、曲がり梁を10本と、日々を重ねた腐食の風情が美しい瓦、古道具等を金陵さんに譲っていただくことができました。

いただいた瓦は庭に積み重ねモダンで日本的な風情に。梁は内部構成梁の一部として存在感たっぷりに利用しています。

屋内には、“おくどさん(竈)”や、奉納幕の張られたオープンキッチン、石張りのカウンター台など、遊びのある要素を取り入れ、窓際へは【桜の抄】でも好評であった一人がけのゆったり椅子席を配置。一方、窓際と比べ、席自体の魅力が半減すると考えられる“中間”のゾーンには、居心地の良い、張り地が華やかな円形のソファを配しました。

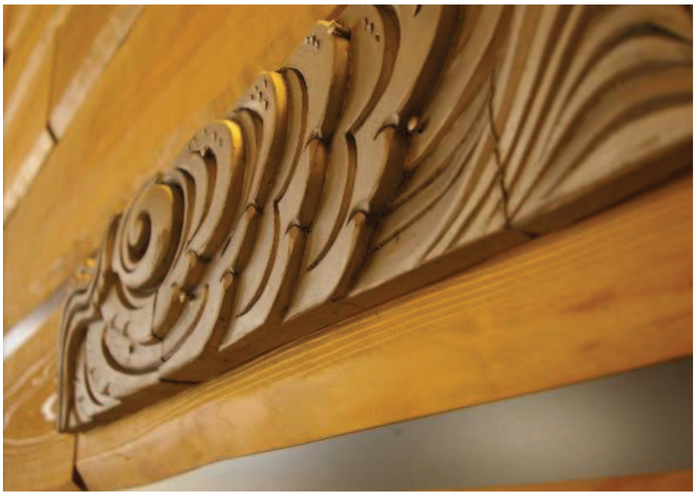
窓外には、塀で囲まれた別世界として坪庭を創りだすことで、レストランと合せて区切られた空間に表現される日本の美を演出しましたが、これについては、日本伝統の石、白河、雑木を配した季節の庭を山田茂雄造園事務所に依頼。

この山田先生は、【紅梅亭】の外風呂のお庭や、お茶の水にある、ミシュラン2つ星を獲得している【庭のホテル】にも携わるなど、和の世界に庭の視点から心を注いでいる造園家です。

山田先生の感性については、近兼社長も大変信頼してくださり、先生と共に空間を作りたいという想いでは一致していたものの、伝統的な作り込んだ日本の庭というよりも、雑木等を使い、自然の林を写したようなナチュラルな庭(まさに山田先生の得意のところではありますが)をご要望の近兼社長と、本格な庭を考えていた石井設計とは、その方針について議論になった事もありました。

最後の仕上げとなる装飾については、地元・香川県や四国の工芸品、伝統的な要素へ情熱を持つ富士建設の想いもあり、【金毘羅参詣名所図会】の図案や、香川県

右上／讃岐の伝統的な水板瓦　左上／客席に面したカウンター　右下／紅梅亭の歴史を彩る写真のディスプレイ　左下／パーティションに見えるのが伊予の和紙



の伝統工芸品である【家紋彫り】を採用。改装、増築全体の装飾のためのグラフィックや、既存の売店什器をリフレッシュさせるための飾りへと生まれ変わりました。

また、間仕切りには、お隣の愛媛県で、伝統工芸と現代の感覚を融合させる取り組みを行っている【五十崎社中】の和紙を使用し、香川県の伝統的な水板瓦をアートに昇華させる試みとして、請川窯業より提案を受けた【瓦アート】をキッチン壁面に飾っています。

他にも、この場所の成り立ちを表現し、訪れる人々へ、【丸忠】がここに復活した意味を感じていただくために、残された写真や、パンフレットの図案の一部、琴平の昔の写真等を組みあわせ、より具体的にビジュアル化するために額装した作品を制作。【丸忠】へとお客さまを誘うアプローチ部へ取り付け、楽しんでいただけるようにしています。

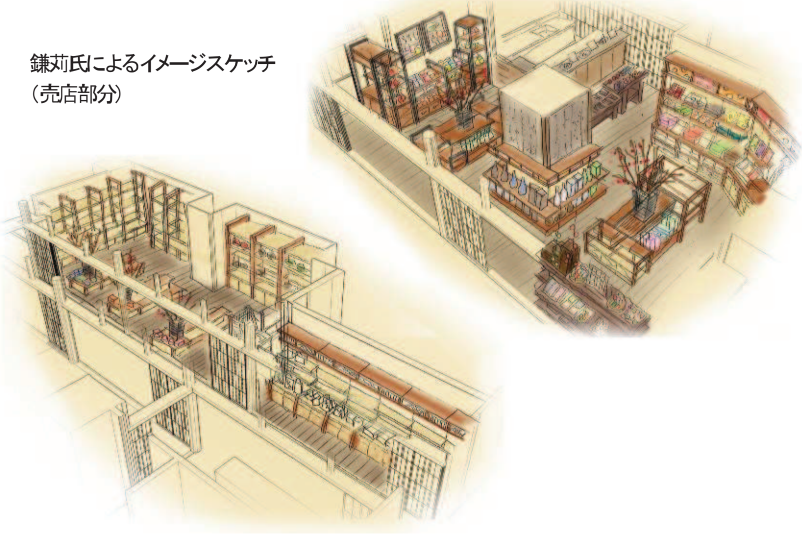
そのひとつひとつ、割烹ダイニング【丸忠】を構成する全てが『ALL KAGAWA・SHIKOKU』を表現し、柔らかな伝統の心と歴史の物語を散りばめる事が出来たと思っています。

「紅梅亭を、琴平を、香川を四国を盛り上げたい。来ていただいたお客様に、楽しんでもらいたい。」

その近兼社長の想いと、石井建築事務所のデザインが融合し、富士建設、香川の伝統工芸に携わる皆さまがそこに集い、協力し合い創り上げることで出来た、新しくて懐かしい【割烹ダイニング丸忠】。どれが欠けても今の雰囲気と空間は創り出せなかったと思っています。」（鎌苅氏）

＊＊＊＊

割烹ダイニング【丸忠】に込められた皆の想いが、琴平というまちの新しい表情を引き出す日がくることを、心から楽しみに待ちたいと思う。（了）



鎌苅氏によるイメージスケッチ
（売店部分）

この季節を暮らす。（22）

【季節に応じた暮らし方／4月8日はお釈迦さまの誕生日／花祭り】

花祭りをお祝いしたことはありますか？

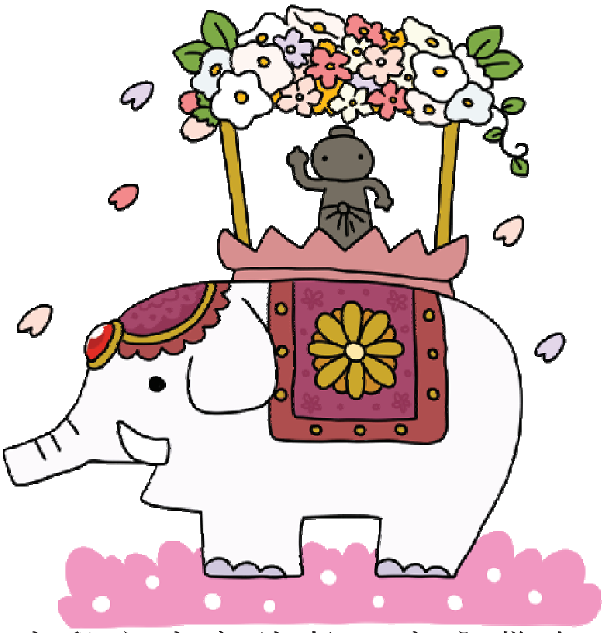
四月は春爛漫、満開の桜の下で花見を楽しみ、草花を愛でるのも楽しみな季節で、これもまた花祭りではありますが、今回ご紹介する「花祭り」は、灌仏会（かんぶつえ）、仏生会（ぶっしょうえ）とも言われるお釈迦様の生誕祝いの行事です。

◆お釈迦様の誕生

今から約2500年前の4月8日、インドのヒマラヤ山麓の小さな国、シャカ族の皇太子として生まれました。本名はゴータマ・シッダールタ。母である妃のマーヤは六つの牙を持つ白象が天より降りて体内に入る夢を見て身籠ります。出産のために里帰りの途中、立ち寄ったルンビニの花園でお釈迦さまが生まれました。そして生まれおちるとすぐに立ち上がり、七歩歩くと、右手で天を指さし左手で地を指さして「天上天下唯我独尊（てんじょうてんげゆいがどくそん）」と言われたといいます。この時、九竜が現れ、天から甘露を灌いで誕生を祝福したそうです。

◆どんなお祭り？なぜ花祭りというの？

一般には新暦4月8日、各地のお寺では様々な草花で飾った花御堂（はなみどう）に立つ釈迦像に甘茶をかけ、お釈迦様の生誕を祝います。



地方によっては旧暦の4月8日、或いは5月8日のところや、4月8日前後だったりするようで、外国では夏だったり秋や冬だったり、世界でも統一されていません。

日本では仏教は神道とともに生活の中に溶け込んでいるのに、開祖であるお釈迦様の生誕日・花祭りの日を憶えている人は少ないようです。キリストの誕生日であるクリスマスは小さな子どもでも知っていますが、仏教徒の多い筈の日本でクリスマスほど日を覚えられていないのは、こうした日のばらつきがあるからなのでしょうか。

花祭りという名前は生誕伝説に由来して、ルンビニの花園のように様々な草花で花御堂（はなみどう）という小さなお厨子を飾ることからきています。

花祭りでは、花御堂の中に灌仏桶を置いて甘茶を満たし、中央には「天上天下唯我独尊」の姿をしたお釈迦さま（誕生仏）の像を置きます。参詣した人々が、竜王が天から降らせたという甘露のようにお釈迦さまに甘茶をかけて祝います。

そしてこの花御堂を作り物の白い象の背に乗せて地域の子ども達が稚児衣装を着てとても可愛らしい姿で引いて歩いたりと、賑やかに行われます。

京都などが盛んなようですが、富士建設本社のある三豊にもこの花祭りを盛大にされているお寺もあり、子ども達が甘茶をそそぐ姿はとても微笑ましいです。

4月8日、皆様のお近くで花祭りをされているお寺はありますか？

もし、近くになくても、花御堂に見立ててお花を飾る室礼を楽しんでみるのはいかがでしょうか？

「天上天下唯我独尊」とは「天の上にも天の下にも、誰とも代わることのできない尊い使命を持っている」という意味なのだそうです。花祭りは、儚くも美しく咲く花に生命の尊さを考える日でもあるのだとか。

甘茶をいただきつつ、花を愛でながら、お釈迦さまの生誕をお祝いする日にしてはどうでしょう。

（文・曽我部みどり）

＊甘茶とは、いわゆるアマチャヅルではなく、日本原産のユキノシタ科の落葉低木ヤマアジサイやガクアジサイの変種、別名を小甘茶（コアマチャ）と呼ばれる植物の葉を採取し、天日干しと乾燥を行ってお茶にしたものです。葉を乾燥させることでフィロズルチンとイソズルチンという物質を生成し甘味を作るそうで、甘茶の甘味は砂糖の約200倍の甘さと言われ、糖尿病など糖分を制限されている方の砂糖の代用品に用いられるそうです。

中津万象園

「花の歳時記」（22）

新緑の岸辺を飾るゴモジュの花

新緑の万象園を訪れ、満開のツツジやサツキを観賞しながら、池泉北側の回遊路を西方に向かって歩みますと、やがて左側に園内最大の島「晴嵐の島」が迫ってきます。その島沿いに歩を進めますと、「晴嵐の島」の西側には「魚楽亭」のある「月の島」や、ゆったりと横たわる「夕映えの島」があり、それらに囲まれた池水には、スイレン（ヒツジグサ）が円形の葉をうかべ、各所に可憐な白い花を咲かせ私たちを癒やしてくれます。

その上、これらスイレンの咲く池泉「八景池」周辺の石組みなどの内側には、各所に高さ1～3メートルのこんもりと茂ったゴモジュが、枝先に小さな円錐花序を出して五弁の白い花を枝もたわわに付けて、同じく白い花を水面に浮かせたスイレンと絶妙な調和を保っています。このゴモジュは、奄美大島から沖縄諸島にかけて特産する常緑低木で、白い花に覆われた樹姿が美しいことから、日本内地では九州・四国地方で、古くから庭木として植栽されていました。

なお、この「ゴモジュ」とよく似た樹木に「ゴマギ」があります。両者は共にスイカズラ科のガマズミ属で、植物分類上は兄弟のような関係ですが、前者が常緑・低木であるに対し、後者が落葉・高木であることが最大の相違点です。なお、「ゴマギ」は枝を折って鼻を近づけますと、ゴマのような芳香がしますが、「ゴモジュ」の場合は無臭です。

（長岡　公）

<中津万象園・丸亀美術館へのアクセス>
瀬戸中央道路　坂出北ICより
約 8.5km／約 15 分
坂出ICより約 14km／約 20 分
高速道路善通寺ICより約 5km 約 10 分

【長岡　公　氏】

昭和2年10月　香川県丸亀市津森町に生まれる。
昭和26年3月　鹿児島大学鹿児島農林専門学校農学科卒業
昭和26年4月以降　香川県公立高等学校教員として主基高等学校・飯山高等学校・笠田高等学校・農業経営高等学校教諭、高松南高等学校・飯山高等学校教頭
昭和63年3月　定年退職　香川西高等学校教頭
現　在　公益財団法人中津万象園保勝会　理事

※主な著書に「讃岐の名園紀行」（栗林・玉藻編／中・西讃編）「丸亀城　花の歳時記」がある。

古来より季節を感じさせた「色」を知る。

かさねの色（22）「桜」

日本人の季節を感じる心、
美しいと感じる色彩感覚。
そういったものの結晶とも言える「重色目（かさねいろめ）」は、平安時代に生まれ、季節の移り変わりを表現する配色として併せ仕立ての着物などに用いられました。現代でもしつらえなどにいかして、平安の風雅を味わってみては…。

表：しろ／裏：赤
着用時期は春。赤い若葉の上に
白い花を咲かせた山桜の姿を写しています。

【編集後記】　今回の「物語のある建築」は、琴平グランドホテルさんの【割烹ダイニング 丸忠】。ホテル宿泊のお客さまのニーズに合せて、部屋食からレストラン食へ対応するための増築と思っていたのですが、お話を伺うと、「地域を元気にしたい」という社長の想いも見えてきました。

わたしは、「良い建物には、世の中を変える力がある」と信じています。世の中とは、社会、文化、風景、人生、生活全てを含んだもので、それらに対して、建築というハードが与える影響は、実はとても大きいと思っているのです。（もちろん、ハード面だけではダメですけれど…。）

今、色々な施設や建物が老朽化し、建替も多く発生しています。皆さまの関係している建物でも、そういった機会があるかもしれません。その時にぜひ、この「良い建物には、世の中を変える力がある」ことを思い出してくれると良いナ、と思うのです。コストや様々な制約がある中で、建築計画に「世の中」のための何かを加味する…というのは、難しいことですよネ。それでもなお、それができれば、どれほど豊かな社会になることか！　――想像してみると、何だかワクワクしてきませんか♪

***********御意見、御感想をお聞かせ下さい*************************************

建設業許可：香川県知事許可（特23）第189号／一級建築士事務所：香川県知事登録　第416号／宅地建物取引業免許：香川県知事登録（10）第1997号

FUJI
富士建設株式会社
本社：〒769-1101 三豊市詫間町詫間 300 番地 1
TEL0875-83-2588（0120-832589）
FAX0875-83-5864
http://www.fujikensetsu.jp
mail　y-manabe@fujikensetsu.jp（真鍋有紀子）

【発行者紹介】富士建設株式会社は、現存する五重塔55基のうち2基を建立し、「建築は文化なり」を理念に掲げて、官公庁建物・各種施設等大型建築物をはじめ、数寄屋風住宅、デザイン住宅、リフォームまで幅広く施工している。また、県下において 1300 区画超の宅地開発・分譲の実績を持ち、「街づくり」に対する貢献には定評がある。なお、丸亀市指定名勝である「中津万象園」の修復維持保全活動も行っている。

■営業所：高松営業所・丸亀本店・観音寺営業所
■中津万象園・丸亀美術館／丸亀プラザホテル／味処　懐風亭